へ14
4409
1

山田美妙
弧狐
おるめる係数表
自至至級
二表

へ14
4409
1-2

へ14年引

原稿

十行廿字一百五十枚　全二万五千字

（組上）

十一行廿字一頁（二百九十字）

右原稿組上二百二十頁

へ14 特
4409
1

4（[illegible]）

風刺文学 2

人を依頼る

ゴチック

一 人の失意の時を言う。

権利義務に下落するのを権利失墜という。

世に成り出て職に有り附くのは鉄を出して魚を捕れるか猪を怪しいものから捕れるかと思って追い回して掛かって一回活け洲の釣り堀を掻き回すなり

早稲田文庫

もぶと、つくづく己れ寒風兵太郎は考へる。

流れ洲の釣り堀

るのは釣られに来る馬鹿の巾着銭を自分の方へ釣り取らうとする魂胆なんだ。

上手に魚を捕らわ見る。

流れ洲の巡り

上手に魚を捕らわ見る。

流れ洲の堀の水が干上がって仕舞ふ。そこで本当の役目は之を釣り、また本当に魚は好みを餌と言ふ。

捕らわるもの。

大橋

る。

と云ふ。

で、

で脇の蟹の有る所、釣り堀に行って魚を

で河でも奴らい、釣り堀に釣り

で沼でも何か有る。

上に見て揚げて釣り

単調に釣り堀でも釣る。

浅の上に揚げて釣

句魚にまで手を掛けて出て

の上に掛ける。

手の遊句則して津波を漏らし

物に掛かって

死に物狂ひ

で、

高く怕して見る。

徒に餌損をする。

徒に餌損をする。

二足三足捕

指程の

鮒一匹の値は五銭くらゐに附く。感心にも高い鮒だ。

こゝも上釣り堀流に隨分行られるよ。釣てゐるうて釣られるさよ。真先は大東氏さうな先輩だ。

こゝて大東氏の如く行く迄は何とも思はぬ、いつとなく沈して街道前まで行く所で、もう胸がしくさくさね。

何らしらん、先客が来てやがら！

下埼な先客だ。

こゝさうよ一所懸命が折角大

東氏へ顧み申て思ひて来ることを、知らぬは言ひなりで、先回して大東氏を追ひ談が何の為てこの撥鋒を制すると

は！

仕方が無い。

上ゝし遍草食てゆらの再挙に為ることを、お

はの内つ踏み込み為られて為ることを

轉じて、知らん顔で真直向いて馬鹿らしくて先方へ

と行く。

心中思ふ馬鹿らしくね。

不斷得意の時は、但し、こは

題も義務とも考へ

何事とも大抵権利で抑へ

微すが、此頃のこゝ

仕失敗の時は節を屈して何事をも大抵義務と観念する。要するに権利義務の境界は斯の如しである。

義務と観念して、無趣味の無駄骨を無益に歩くのは無意味と思はれて何時の事だか知らない。

義務として遂々行はるるに至つた。

わい意の断定と遂々行はるるに至つた。

地の悪いのは、生憎や曲がり角が無い。

有り合せの早く曲がつて了つて、大半氏の[illegible]卵の背後迂回と決行して、更に正面攻撃を為す。

うと思つたのは、中々迂闊に行かない。

客を若干都合の田舎の新聞紙の文を云へば、同情の無い奴は知れ難い。

らく家数の、彼是六十軒も行かうけれども、前世紀式の田舎の曲がり角に到着する迄、こんな思案を回らす。

て、思ひ草臥れて、いつそ一思ひに釣られ

闘牛に回転して立ち疾くそこらを。
廻る為いさ、誰ふて無駄歩くのは
不好だ。が、すぐ一寸無う出来るもんぢゃ往
来の奴等が、迷惑がる。詰けい奴ぢゃと見
やがるらしく、見れば見る程ムカつく
いつらを。
そこへ小僧の使ひ見た様な、御前
らしいものが、真しく又出て、
が大東氏の裏口に来る所へ、ぐるぐる拳を鑑定
のうる顔まで捻って、いよ〳〵前の往来に

又改めて出現した。
太陽で、これは豪流の惑星。彼の無形の
ぢりて冥々の裡に己れはうめわて、高麗鼠の
ように小さくなって、下駄減
らしてゐるんだ。
不埒な客は何ぢゃ。
門前に立って、この眼はいったい
何度か鏡にうつして、門内の溜飛をもやうと
ちらつ眺めるんだ。
「高生めーし」と斯う言ふ外は無い。溜

脱ぎに依頼する位の體裁で、先客の奴の靴が多

有る。

全く其靴を見る時は、己れは其靴が靴

でなくて実際は黒猫の黒犬で、己れが

つかまえて行く、直しく早く心得て、

しかも身を交はして、しかも気がつかない

ら可かりしと、自分ながら無理には思ひ

ら実に思ひ切れね。

靴までも最く憎いや。

いっそ貰ひて押し掛けて其靴を献飛ばして

遣らうのと思ひも、思ひも、と言

ふ夫よ。どうも決行の男氣は無い。なアに、

勇氣でもない、蠻氣でもなければ、

豪胆切った蠻氣が何れも出さうなもの

往門前素通りさ。

又前と同じ往来を通るんよ。客番の奴等が

己れを見る様子が最く怪訝顔をしてゐる

思はれる。己れの方からは他の時と違って、平

氣で豪居々々と見ぬ行くなんて事は決して

出来ないよ。

十三

世のつて入町がつて。そして、又前の如く大宋氏の此邸の裏に当る。ら思ひ出る。

そし面る。ぞうそ見この御門前まで出る

行く迄に、あの靴が消えて無くなつて居て失

わるれと、中で狐と祈つて

「日雇らてく格で、今日は

わて、願ひ事と聴いて呉れる神様は無いの知

らと、こは狐と真向目腐て、歩きるで

吃いつ

「最大豆恵の神様まるで、假令願ひ頼ま

ずとも、何をうるの様の利をして下さるみ

笑はずにゐるし、軽を売がる。

昌平で御門前ぬ。すると、思ひの

外の不思議の事件ぬ。

御門内のつを見ると

来ぬ。ゆくと、向の十狗が飛び出して

靴を噛へて、さア奪ぬ、十狗の如く

狗が復讐物で巫山戯ると

靴は何麼如何ぬ。

倒の珍らしく

とて異

の笑をめのぐるる。

大正

か。

先客はお其和尚までこれは忘れて驚き怒り

て。靴[illegible]を激飛ばして怒ら怪れ思いて

が、それは己が往く主人の回答する事怒る其先

客に越されんことを之の利害問題いらして只管に

怒りのみ。靴に些しも咎は無い。

の無邪気は悪戯の或らは何所へか靴を失っ

て了ふ其先客の常慣は偖もこれ何らでもらの。

と、暫らく考へる内の、寡れ、其時に

て己れ利欲りの念は微塵も無くて、旦旦靴

と取り戻さし、持ち主に返して[illegible]と云ふ

是丈しの思ひけるのうち。此所に日も神と

まぶ。申さると寄ねて己が勿ちて

て活き伸様ふ。

そこで直と大と呼び上げる。

う口角ふ。大ぶ人向の表情を解して想

議は有る。己の金力を忘れて笑顔に

及ひ己の曲節を弄してる口角に

怒恨。靴を取り上げる少るず振り返て腰

が、靴を地上に置いて嬉しく顔して

これを見て、彩は尾を振って、大分も靴は咥へ草臥れて居る。

ふた。

旦那行くと、これは猫。そこへ大の懐柔策。

人間も遠って賄賂は安らうよ。

これは豆〻〻古鼓と抱つき、前足を伸ばして、大の頭を撫でる。

大の頭の最期、其大そぐに軟化さうな。

技倆はこの事有る。

これは猫者でも、巧者である。

大好きは御承知、大の癖所は耳の根。そこで、猫は耳の附け根は大のみで、牛でも豚でも搾れる。彼等の癖で、思って猫系の癖。大系の狼、耳の根は弱られて快感と覚える。其癖所に遠慮無い。

亜非利加か、亜比利亜へ行って、これは大の弱く手が抵抗する。其に獲物の技巧と怠らず。

或は此独

[illegible]年を過らして、大の耳の根を掻くと、そ少ら見るの、大は大恐悦ど。

[illegible]て眠を平向されて可して、この頭をみて[illegible]

ど[illegible]て、そして津逆を高くして。

を吸して[illegible]

[illegible]

[illegible]

二

第二の日記

自分の[illegible]

春と

らい。

そこで、父は、子供に、ものを教えるとき、ほかの人は、教えるのに、ただ、ものを、教えるのに、人の、教えるのを、見ると、人の、教えるのを、見ると、人の、教えるのを、見ると

「[illegible]」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「はつる　[illegible]でこざいます。」

「[illegible]」

「はい　[illegible]」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大はし

[illegible]

「へい、[illegible]」。うつつ「[illegible]」よ

でと[illegible]よ。

「[illegible]」と、[illegible]

[illegible]

「[illegible]」と言ひ合ひ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「くくくく」。

[illegible]

「[illegible]」

[illegible]

此ニハ此識ノ意ヲ。「機」トモスコトヲ

[illegible]

「[illegible]」

[illegible]

[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]

「[illegible]」

[illegible]

たはし

「その……」

「……」

「……」

「

偽書類に交る直譯の文は
敬偽書類では偽書と言ふ

「いんしゅうでし。」

「ふるい所の、いとゝ遠のみ動のこと。」

「なるほど。」

「なるほど。」

「有りがとうございます。」

「わたくしは、」

「錦旺ちゃんと、」

「ごゆっくり。」

「そこへ、」

「ふるい酒屋の、」

「酒屋の、」

「ふるい、」

「そこ、」

「いかがなもの。」

「そこで、酒屋をドンサイてこい。」

「よし、行ってこい。」

「はゝ、」

「大事はちゃんとよ。」

「あれ、ぶつの猫こそ。」

「なに、人もしやえべいいとな。」

「なに、人もしやえべいいとな。」

「なに、人もしやえべいいとな

[illegible]

「[illegible]！」

[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

行き倒れて死んだ。

「ほれ、まだ、

「伝ふるもの。

知りもせず、

知らぬ、

「ここ、

「ここ、

「ここ

わ

昼はし

なし。

松

松

松

「ようございますとも。
「でも、まあ、ほんとうに、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

安達

[illegible]

[illegible]

[illegible]

※世ゑぶヨノ節ノ字

51

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大楊

三わ

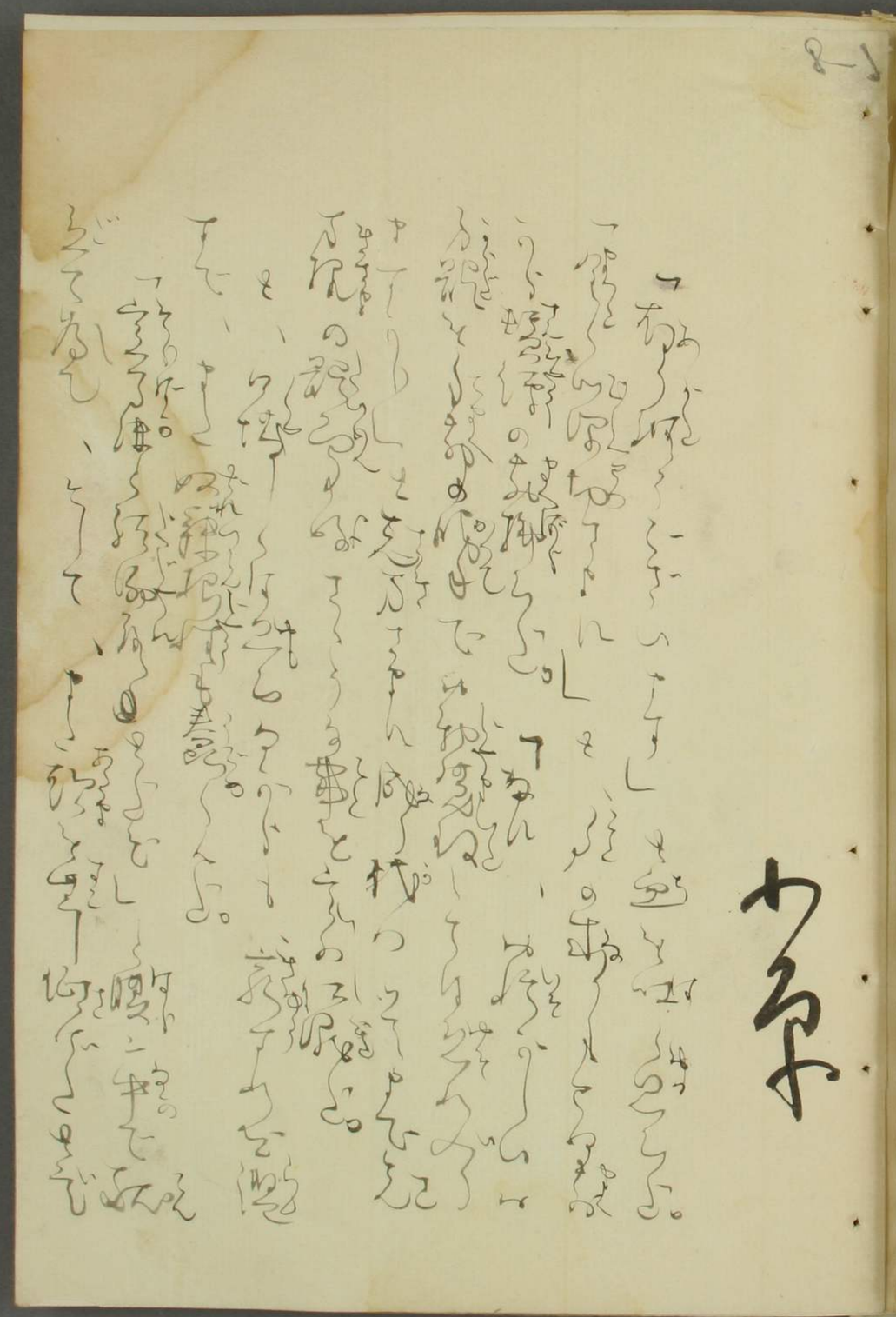
「はるかぜの　ふきてはなの　ちるときは
　ひとりぬるよの　ねざめぞ　しられ
　ける」と、これは　はるの　ぬるよの
　ねざめの　ことを　いへり。

「ふるさとの　はなの　ものがたり　
　ひとりぬる　ねざめの　ことを　
　しるらむ」

「ふるさとの　はなの　ものがたり　
　ひとりぬる　ねざめの　ことを　
　しるらむ」

「はるかぜの　ふきてはなの　ちるときは
　ひとりぬるよの　ねざめぞ　しられ
　ける

小布



京

[illegible]

「アセアセとなんだ。」

[illegible]

「アセアセとなんだ。」

[illegible]

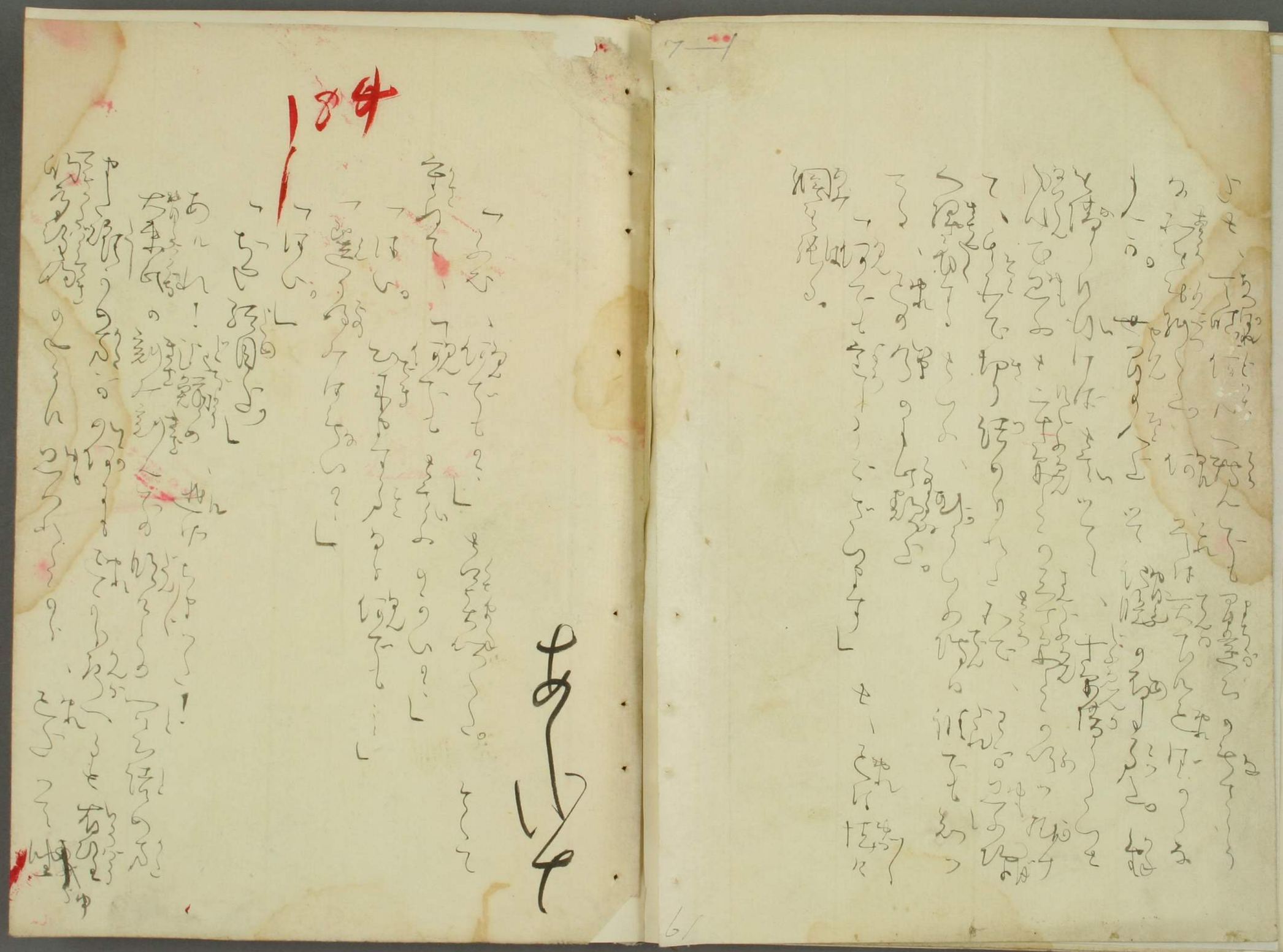
「[illegible]」

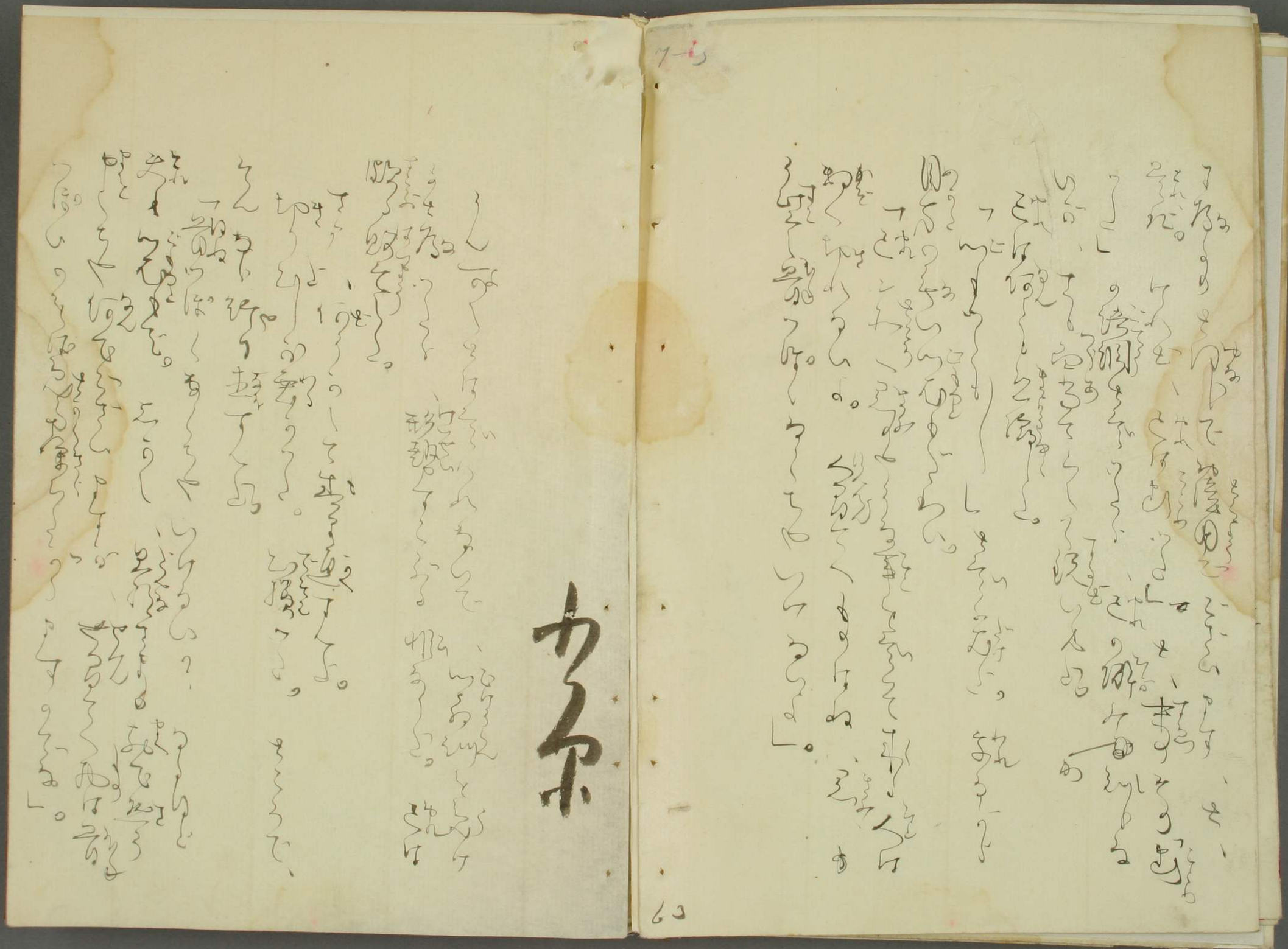
[illegible]

「[illegible]」

[illegible]

「[illegible]





「君の出でたまふとて迎へに
来たるなり。僧しるし
給へ。」
「いとやすき事なり。
いざ給へ。」
とて、
にはかに
[illegible]
の、
[illegible]
「[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「[illegible]。[illegible]」

はゝ、[illegible]。

[illegible]。[illegible]。

しかしよ。やっぱり[illegible]。

「やっぱりそうだ。」

「[illegible]。」

[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。